



コンパニオンと一緒に大会
マスコットキャラクターの
咲ちゃん登場。

はじめての国体

平成時代は、市の歴史上でも、経験したことのないような大きなイベントや、50年に一度の開催のようなイベントが相次いだ時代だった。その中で、忘れることのできないイベントが平成8（1996）年にあった。ひろしま国体である。

ひろしま国体開催までの道のりは、昭和の時代から始まっている。広島県は昭和59（1984）年3月に、第51回国民体育大会の誘致を決定、昭和60（1985）年9月には文部大臣に対し、誘致に関する要望書を提出し、昭和63（1988）年3月に承認されたことで開催が決まった。そして平成元（1989）年5月に、大竹市で卓球競技と山岳（登山）競技が行われることが決定した。前回、広島県で国民体育大会が開催されたのは昭和26（1951）年の第6回大会のことであったが、このとき大竹市域では競技は行われなかったため、市にとってはまさに初めての国体開催であった。

い力の入れようだった。まさに、民泊を受け入れた自治会や家庭もみんなが国体に参加しているつもりになった、心からの歓迎だったのである。

さらに、各都道府県の監督・選手たちは試合当日、会場の総合体育館で感動の光景を目にする。民泊家庭の家族はもちろん、自治会挙げて会場に陣取り、民泊を引き受けた他県の選手を精いっぱい応援したのである。まるで、各県から試合会場に応援にやってきたサポーターのように、横断幕を掲げて一生懸命の応援合戦を繰り広げたのである。

感謝の便り続々

後に国体に参加した多くの監督や選手たちから「私たちが到着するなり歓迎の宴、そして毎日早朝からの朝食作りや夕食の準備、いろいろな手間がかかった変化のあるお献立、そのご苦労を感じつつ甘えさせていだきました。またベスト8に入れば、お祝いだとタイの造りやヒラメの刺身など、豪華なごちそうに自治会の皆さまにただただ感謝するばかりでした。一方連日の応援、しかも準々決勝では、地元広島が相手であるにもかかわらず、我がチームに躍起になって応援していただいた、そのご好意が痛いほど心にしました。本当に幸せな一週間でありました」

「大竹市民のフェアプレイ（応援）」

平成4（1992）年、県準備委員会は、国体のテーマとスローガンを広く募集した結果、テーマを「ひろしま国体」、スローガンを「いのちいっぱい、咲きんさい！」に決定した。マスコットキャラクター「咲ちゃん」後に「咲ちゃん」の愛称で多くの人に愛されたマスコットキャラクターは、デザインを公募して決定し、愛称も一般公募、応募総数1万4580点の中から「咲ちゃん」に決定した。大会スローガンの「いのちいっぱい、咲きんさい！」から名付けられたそうである。また「咲ちゃん」の頭の上にもみじが乗っているが、これは大会スローガンがイメージされるようにと、広島県の木である「もみじ」が重なり合っているデザインとなっている。さらに胸の「H」は「広島」の頭文字でもあり、おもてなし

市制施行70周年連載企画

振り返る
70年

問い合わせ
企画財政課 ☎59-2124

第11回 民泊でおもてなし「ひろしま国体」

大竹市で開催される国民体育大会。しかし全国からの選手団を受け入れる宿泊施設がなく、この難局を乗り切るために各地区・各家庭での民泊を実施。これが思わぬ効果を生み、各地の選手は自分たちの選手とばかりに応援に熱が入りました。



（上）大会後「民泊の思い出集」を発行。監督・選手からの便りや受け入れ自治会の感想を掲載（下）大竹駅に青森県選手団を出迎えた西栄1丁目自治会。



（上右）民泊家庭の料理講習会（上左）選手と一緒に大竹音頭を踊った本町2丁目（下右）滋賀県選手を激励する元町2丁目（下左）民泊受け入れ選手団を各自治会が応援。

の心を意味する「ホスピタリティ」の「H」でもある。

民泊の受け入れ

ひろしま国体の開催に向け準備を進める中で、大きな課題となっていたのが、選手たちの宿泊場所の確保であった。山岳競技の選手・監督を含む大会関係者については、山岳競技会場連合実行委員会を構成する2町1村（※佐伯町、湯来町、吉和村）で受け入れてもらうことで対応できたが、市内には宿泊施設が少なく、かつ収容能力もかなり低かったため、全国から131チーム、524人の卓球競技の選手・監督たちの宿泊場所を確保できそうになかったのである。

この難題に対し、平成5（1993）年7月27日に設立された市実行委員会で協議を重ねた結果、思い切って一般家庭を宿舎とする「民泊」を選択した。さっそく平成6（1994）年10月の市広報で受け入れ家庭の募集を行ったものの、18軒の申し込みがなく、まだ100軒以上が不足していた。さらなる協力を市民にお願いするとともに、各自治会にも協力を求めた結果、最終的には124軒の受け入れ先を確保し大会を迎えることができた。他の競技会場となった市町村のなかにも「民泊」を選択したところはあったが、多くは



三倉岳県立自然公園内に設置された人口登はん壁で行われた山岳競技。

集会所や公民館などの施設で宿泊し、食事などの世話を地域住民がお世話する共同民泊であった。大竹市では民泊を引き受けた124軒のうち、38軒が一般家庭に宿泊する「完全民泊」を実施している。

※現在、湯来町は広島市に、佐伯町と吉和村は廿日市市になっている。

感動の民泊と心温まる応援

この一般家庭での民泊が、大会では思わぬ結果を生む。民泊受け入れ先の家庭が、まるで選手を家族のように温かく迎えたのはもちろんだが、その家庭が所属する自治会挙げでの心温まる歓迎ぶりに選手たちは驚いた。今まで幾度も国体に出たことがある彼らでも、自治会からこれほどの熱烈的な歓迎を受けたのは生まれて初めてだったのである。民泊受け入れ家庭や市内45自治会では、大会本番の数月前から宿泊受け入れに向けて献立講習会、食品衛生の講習会を受けるなど、準備に余念がな

に感動しました。どこの国体でも感じるのですが、地元選手に対する大声援にうんざりしておりましたが、今大会における大竹市民は、公平、平等に応援されていたと思います。ボランティア活動が盛んとお聞きしました。大竹市民の良識に感動しました」

「リラックスして試合に臨めた。家族みたいで、一生心に残ると少年女子の選手たちが話したように、選手たちには忘れられない感激となった。これまで何度か「民泊」したことがあるが、こんなに熱烈的なのは初めて」と感謝の手紙が届いた。

思い起こせばかつて、終戦によって海外から大竹港に引き揚げてきた41万人の人々は、ほとんどがやつれ衰えて実に痛ましい限りであったが、大竹の人たちはそんな引き揚げ者を心から歓迎し、精いっぱいのおもてなしでこれまでの労苦をねぎらったという歴史がある。わずかな日のおもてなしであり、しかも随分昔のことであるにもかかわらず、その心配りを忘れられないという引き揚げ者やその家族の方が、平成の初めごろにも、大竹を訪れることがあった。「ひろしま国体」で大竹を訪れた選手たちは、もしかしたらあの時のおもてなしと同じ心配りを味わったのかもしれない。